

特集 第2期経営計画に5年後の夢を乗せて

コロナ禍でこの一年、その動きが止まってしまうかもしれませんが、第二期経営計画の五年間でそこは続けていきたい。地域の自立した高齢者の介護予防、フレイル予防の拠点になれば、本当に何か困ったときに、楽友会の各種サービスに直ぐに繋げる体制ができます。



常務理事・偕楽荘施設長 鶴岡哲也

鶴岡 軽費老人ホーム偕楽荘は、自立の方を対象にした入所施設です。ご利用者だけでなく、地域の自立されている高齢者の健康寿命を延ばすことを一貫としたテーマとして取り組んできました。この五年間で、そこはすぐ進んだと思います。イベントをすれば来てもらえるし、何かあれば相談に来たり、協力してくださる地域の高齢者の方が増えてきています。



楽友会では、令和3年度から7年度までの5年間の法人運営の方向性や施設事業所の取り組みをまとめた『第2期経営計画』を策定しました。今後の5年間に向けた思いを、3人が熱く語りました。

第一期計画五年間を振り返り 次のステップへ

鶴岡 楽友会では法人長期ビジョンに掲げた将来像に向け、平成二十八年度からの五年間『第一期経営計画』に取り組んできました。振り返ると、特別養護老人ホーム白楽荘では、看取り介護が増えていきます。介護保険制度改正で原則要介護三以上の方が入居対象になったことも要因でしょう。

齋藤 かなり前の話ですが、白楽荘副施設長をしていたときに、自分自身も含め、職員の意識を変えていくことが一番大変だった印象があります。制度が変わったのに「昔からこうだった」「先輩にこう言われました」という反応が当時は強かったですね。やはり、大きなビジョンのもとで、法人が一丸となって取り組むべき指標が大切であると感じたことを覚えています。

芦田 第一期経営計画に基づき、法人として今までと違う形での取り組みをしてきました。特養というハコの中に居ると、どうしても職員が外の空気を感じる事が少ない。古くからある施設であるが故に、漠然と今までやってきたことを続けていくという感じがありました。良いところは引き継ぎ、時代と共に新しいものを取り入れていくことがとても大事であることをこの五年間で現場の職員たちも認識してきています。



白楽荘施設長 芦田弥生

芦田 特養では、様々な業務改善に取り組んでいきますが、単に効率的にというだけでなく、職員が楽しく仕事ができるように、そしてご利用者と共に職員も守っていけるようにしたいですね。介護機器やICTを活用することにより、負担軽減をしていきたいし、職員がご利用者ともっとゆとりをもった関わり方ができるようにしたい、という思いが強いです。

これからは地域貢献が重要なテーマとなる

鶴岡 楽友会周辺地域の多摩市や八王子市の状況を鑑みると、これからは、法人として地域貢献をしていくことも大切だと思いますが、どうでしょうか。

鶴岡 通所介護は、以前よりも軽介護の方や要支援の方が増えてきている印象です。コロナ禍の状況下で、利用控えがあるということは、通所介護に求められている役割が予防やリハビリにシフトしているのではないのでしょうか。



在宅サービスセンター所長 齋藤誠

齋藤 新型コロナウイルス感染症により、この一年間、通所介護は一時休止や事業の一部縮小も含め、様々な対策に取り組んできました。その中でも特に介護予防の必要性と認知症対応型通所介護の需要の高さを痛感しました。通所介護については、ご利用者の心身の状況を防ぐ介護予防が求められており、認知症対応型については、緊急事態宣言下でも利用を控えるご利用者はいませんでした。改めて、私たちに求められていることの大きさを感じています。

芦田 地域貢献は第一期の経営計画を作るときにも、言葉としてはありました。高齢者福祉に関して、困ったら楽友会に来れば何とかなるという福祉のプロフェッショナル集団でありたいですし、地域のニーズなどをちゃんと掴みながら、応えていけるようにしたいですね。後は、気軽に相談できる敷居の低さも大事だと思います。

齋藤 楽友会の専門職は社会福祉士や介護



福祉士、介護支援専門員などの福祉職、看護職員やリハビリ職員などの医療職種も有資格者が大半です。これらの人材を如何にして地域に役立てていくか。事業所を地域に出すこ



とはイコール、人材を地域に投入することと
思っています。

鶴岡 自分も楽友会が持っている一番大きな資源は人材だと思っんですよ。この人材を地域での困りごとや、福祉の活動に役立ててもらうために、積極的に活用していただく体制をつくるのが非常に重要なのかな、と思っています。

反面、地域貢献は体力が無ければ続けられないので、足元の事業は軌道に乗せなければ

新しい発想が生まれたりします。そういう好循環が期待できる場所になったらいいですね。

楽友会で働いているって 凄いな、いいねと言われる法人に

鶴岡 誰もが健康で、最後まで自宅で生活できるというのが理想ですが、実際は、



いけません。少なくともその体力を持ち続けないと、地域貢献には繋がらないですよ。
芦田 介護関係の事業者以外で地域と繋がっているのは、「健幸つながるひろば」とよよん」や「からさだ匠カフェ」ですよ。今はコロナ禍で活動が難しい状況ですが、「からさだ匠カフェ」はZOOMを使いながらやっている。他の事業所や学校などと上手く繋がりがあらず、そういうものがもう少し増えたいと思います。

新しい可能性を広げる 健幸つながる広場 とよよん

鶴岡 昨年度に開設した「とよよん」でいろいろな活動が展開できたらいいなと思うんですよ。その辺りについてはどうでしょうか。

齋藤 芦田施設長とよく話すのですが、特別養護老人ホームの職員が地域に出ていくのは、その業務の性質上難しい面があります。しかし、特別養護老人ホームの職員が地域に出ていく事で大きなメリットが生じることもまた事実です。「地域の生の声を聞くこと」で、自分たちに求められていることや、特別養護老人ホームに地域の方が期待することなどが見えてきます。それらを普段のサービスに活かして欲しいと思っています。

特別養護老人ホームなどの入所施設が果たす役割も大きいと思いますが、その辺はどうでしょうか。

芦田 特養の場合、入居することをご利用者本人が自己選択で決めることは少ないです。若い時に自分の将来は、最後は家族に迷惑をかけたくないから、特養でいいわと思っ
ていても、要介護度が高くなった時点での本人の希望は、もしかしたら違うかもしれません。

鶴岡 そう考えると、特養で生活をする方たちには、もっともっと個人を尊重したサービスや、他に比べてもっと手厚い何かがあってもいいと思います。介護保険制度の枠組みの中では、結構難しいところではありますが。
芦田 外部のリソースなども使いながら、ご利用者個人というか、個を見るといって、施設の職員が、さらに持てるようになって、理想に近づけるところもあると思います。ご利用者個人の想いを汲み取ったケアがもっともっと出来たらいいですよ。

齋藤 私たちは、制度の中で行う事業なので、やはり制度や社会情勢に相当左右されてしまいます。十年以上前には、誰も今の情勢を想像していませんでした。制度に翻弄される部分も多いですが、介護保険制度という枠



鶴岡 団地の中にある「とよよん」が法人職員と地域住民が触れ合う接点、窓口になるということ、平成二十六年に取り組んだ長期ビジョン策定の時から考えていました。

職員はそれぞれ日常的な仕事があります。月一で「とよよん」に行く。そこに行くと初めて自分たちがやっていることを世間の人に知ってもらうとか、認めてもらうとか、あるいは、その地域で起こっていることを知るとかできますよね。そうすると、我々ももっとこういうことが出来るのではないかなど、

組みの中で、いかにサービスを向上させていくのかを考えなくてはなりません。福祉も「人」、介護サービスもやはり「人」です。人材をどう育ていくのか、それを常に考え続ける法人としての風土づくりや理念を忘れてはならないと思います。

鶴岡 冒頭の話から「人」というキーワード何度も出てきました。地域も人でできているし、我々も人の集団です。その人と人をどうやって繋げていくか。上手く活用できるかどうかが大事だと考えます。地域の方と我々職員が繋がり、地域と法人がより良い関係が築く。そうすればいつか、「楽友会で働いています」と言うと、「ああ凄いな」と言っていただけのような法人になれたら、理想的だと思います。

もちろん、楽友会の施設事業所サービスを使うことが、利用する方たちにとって価値のあるものであることが一番重要です。高齢者福祉関連事業者と例えば、真っ先に楽友会という名前が上がってくるような法人になつていければいいなと思います。

(記事中使用した介護職員の写真は、新型コロナウイルス感染症対応でマスク着用で業務を行うようになる前の時期に撮影したものです)